

幕末史 半藤 一利 著 新潮社

## ■明治維新は薩長史観

昨年末に刊行された『幕末史』(新潮社)が11万部を突破した。歴史小説ならいざ知らず、ノンフィクションの歴史ものがこれほど売れるというのは異例といっている。半藤さんいわく、「いまも薩長史観によって、1868年の暴力革命を誰もが立派そうに『明治維新』といっています」「私が皆さんに語ることになる幕末から明治11(1878)年までの歴史は、『反薩長史観』となることは請合いです」。現代日本の出発点を「歴史探偵」はどう見ているのだろう。

——本書は「慶応丸の内シティキャンパス」で社会人を相手におしゃべりした内容をまとめたものですが、講談調のキビキビしたテンポなど、おしゃべりの効用が随所に感じられますね

半藤 物書きってのは、自分の調べたことを全部書きたくなるんですよ。その欲望を抑えるのはなかなか難しい。書き出すとどんどん書きたくなる。ところがね、おしゃべりは口が疲れてくる。だから、えいやっと、省略して話を進めてしまう。それぐらいが聞き手や読み手にはちょうどいいのかもしれないね。

——冒頭で「反薩長史観」をうたい文句にしていますが、読後感を述べれば、きわめて公正な叙述という気がします。

半藤 ははは。「反薩長」とタンカは切ったけれど、現実には史料の制約があって、存分にはできませんでした。もし史料が半々だったら、もう少し違ったものになったかもしれません。

——どういことですか

半藤 史料はあるのですが、佐幕側のものはあまり活字になっていません。活字になっているのは薩長にとって都合のいいものが多いからね。これも薩長がつくった明治国家の政策ですから。ならば原史料にあたればいいといわれるかもしれませんが、残念ながらおいそれとは読めません。佐幕側の活字史料が少ないから、どうしても薩長の視点に偏ってしまうのです。ただ、いまの時点で本音を言えば、それほど「薩長憎し」とは思っていない。幕府は驚くほど無能でしたから。鼻唄(ひいき)にしてかかっても「何だこいつら」と思うことがしばしばでした。

――例えば

半藤 桜田門外の変(1860年)で大老の井伊直弼(なおすけ)があっけなく首を取られ、坂下門外の変(1862年)では老中の安藤信正が簡単に襲撃される。また、薩摩藩の国父であります、何の権限もない島津久光が江戸に乗り込み、武力を背景にして幕府の人事にまで口を出す。久光は殿様である忠義の父親にすぎないのですが、幕府はこれに屈してしまう。この時点で幕府は、国を運営する自信はなかった。

――薩長にはそれがあった

半藤 いや、薩長には新しい統一国家をつくる以外に日本の生き残る道はないという認識はあったでしょうが、明確な国家像などありませんでした。統一国家というものは、国民の意思統合が前提となります。そのためには「機軸」が必要です。しかし、公方さまに代わって外様大名にすぎない薩長が「機軸」になれるはずがない。明治10(1877)年までは何を「機軸」にするかをめぐってさまざまな政争が起こりました。西郷隆盛は強兵を、大久保利通は富国を、木戸孝允は議会政治を「機軸」に国を統合していこうと考えていたのではないのでしょうか。黒船の来航(1853年)から明治11年まで扱った本書を「幕末史」としたのはそうした理由からです。

—明治10年までは幕末の延長だったということですね。これまでの歴史教科書では、天皇家を「機軸」にした国家像を持った薩長が維新を起こしたことになっていますが、それは後付けだった

半藤 そうです。明治10年に木戸が亡くなり、西郷が自刃し、11年に大久保が殺されたあと、新国家は長州の山県有朋と伊藤博文に委ねられます。このふたりが考えに考え抜き、やっと万世一系の天皇家を超越的なシンボルとして「機軸」にすることを思いついたのです。はじめから天皇家中心の国家がつくられたというのはいけません。

—なるほど

半藤 山県や伊藤は頭が良かったと思います。天皇を「機軸」にするために、宮中で行われていた四方拝、神嘗(かんなめ)祭、新嘗(にいなめ)祭といったお祭りを国民とともに祝うようにしたんです。国家をまとめるにはお祭りが一番です。そしてこの時期に国旗や国歌も制定され、「天皇陛下万歳」も定着してゆくのです。(桑原聡)



#### 【プロフィール】半藤一利

はんどろ・かずとし 昭和5(1930)年、東京・向島の生まれだが、父祖の地は越後長岡。78歳。作家。旧制浦和高を経て東京大文学部卒。文芸春秋に入社し、「週刊文春」「文芸春秋」の編集長から専務取締役任に。『漱石先生ぞな、もし』で新田次郎文学賞、『ノモンハンの夏』で山本七平賞、『昭和史 1926-1945』と『昭和史戦後篇』で毎日出版文化賞特別賞を受賞。自他ともに認める「歴史探偵」として、昭和の歴史の謎に挑み、その成果を巧みな語り口(文体)で発表している。

## 幕末史

私は昭和五年（一九三〇）に東京は向島に生まれました。日中戦争のはじまった昭和十二年に小学校に入学してから六年間、そして昭和十八年に入学して大日本帝国が降伏するまでの中学校三年間、まさしく戦前の皇国史観、正しくは「薩長史観」によって、近代日本の成立史を徹底的に仕込まれました。つまりは“官軍”と“賊軍”の史観です。

「宮さん宮さん、お馬の前にひらひらするのは何じゃいな、トコトンヤレトンヤレナ、あれは朝敵征伐せよとの錦（にしき）のみ旗じゃ知らないか、トコトンヤレトンヤレナ……」という歌も覚えさせられました。とにかく、薩摩や長州や土佐の勤皇（きんのう）の志士たちこそが、正義の味方で、尊皇のスローガンをかざして、皇国に仇なす徳川幕府とそこに加勢する賊軍どもを撃破し、美（うるわ）しの皇国をつくったのだと、そう国史の授業で教えられたのです。

ところが、それとはまったく違う話も悪ガキのときから、私は聞かされて育ったんです。というのは、わが父の生家たる新潟県長岡市の在の寒村に、子供の頃、身体を鍛えるために夏休みには毎年送り込まれました。ここにあった越後長岡藩というのは、ご存じのように、戊辰戦争において猛然と“官軍”に抵抗して、城下全体が焼け野原となった朝敵藩であったわけです。つまり“賊軍”です。それで祖母からは、それこそ耳にタコができるくらいにしょっちゅう、次のようなことを聞かされたのです。

「明治新政府だの、勲一等や二等の高位高官だのとエバツテおるやつが、東京サにはいっぺえおるがの、あの薩長なんて連中はそもそもが泥棒そのものなんだて。七万四千石の長岡藩に無理やり喧嘩をしかけおって、五万石を奪い取って行ってしもうた。なにが官軍だ。連中のいう尊皇だなんて、泥棒の屁みたいな理屈さネ」

それはまさしく、それまで学校の先生やまわりの大人たちから教え込まれてきた立派なオハナシとはかけ離れた、裏返しの歴史観といってもいいものでした。そしてついでに長岡戦争で、長岡藩兵の勇猛果敢なる夜襲を受けて、“西軍”の指揮官たる西園寺（さいおんじ）公望（きんもち）だの山県有朋だのが、命からがら、それこそ文字どおり尻に帆をかけて逃げていった、という秘話に、こよなく痛快感を覚え、なにやら子供心にも溜飲を下げたものでした。そしてこっちのほうで正しい歴史なんだとの思いを深くしました。

そんな風に、ガキの時分にごく自然に薩長嫌いとなっていくたんですね。ですから、長じても東京生まれの漱石先生や荷風さんが「維新」などといわずに、徳川家の「瓦解（がかい）」と作品のなかでいっているのに、満腔の敬意をばらうわけです。こころみに荷風さんのすさまじい薩長罵倒の啖呵を一つ二つご紹介しましょう。

「薩長土肥の浪士は実行すべからざる攘夷論を称え、巧みに錦旗を擁して江戸幕府を顛覆（てんぷく）したれど、原（もと）これ文華を有せざる蛮族なり」（「東京の夏の趣味」）

「明治以後日本人の悪るくなりし原因は、権謀に富みし薩長人の天下を取りし為なること、今更のように痛歎せらるるなり」（『断腸亭日乗』昭和19・11・21）

また、先日も、同じ江戸っ子の芥川龍之介の短篇「雛」を読んでいた、「何しろ徳川家の御瓦解以来御用金を下げて下すったのは加州様ばかりでございます」という一行にぶつかって快哉を叫んだりしました。瓦解に御をつけているのもいいし、トクセンケというルビもすこぶる結構でありました。

いまま薩長史観によって、一八六八年の暴力革命を誰もが立派そうに「明治維新」といっています。けれども、明治初年ごろの詔勅、御誓文、太政官布告、御沙汰や御達しの類を眺めてみると、当時は維新などという言葉はまったくといっていいほど使われてはいないようなのです。革命で徳川家を倒したものの、民草（たみくさ）はくやがて薩長が衝突、諸藩がふたたび動き、天下をあげての大乱になるさ）とっていたのです。当時の狂歌はからかっています。

上からは明治だなどといふけれど

治まるめい（明）と下からは読む

そんな革命の有難味に無理解の民草をトコトン教育するために、まずは王政復古が唱えられる。いやいや、古きに戻るばかりなのではない、ということで、つぎに百事御一新となる。以下は、王政御一新、大政御一新、朝政御一新、旧弊御一新など、何でもかんでも御一新ということになるのです。

「維新」の語は、目についた範囲でいいますと、明治二年（一八六九）九月二十六日の薩長土肥の連中にたいする論功行賞の詔書で、

「朕（ちん）惟（おも）フニ皇道維新ハ一（いつ）ニ汝（なんじ）有衆ノ力ニ資スルアリ……」

とあるのが最初かと思われます。さりとは、あとは万事において「維新」になったというわけでもなく、大概は「御一新」で通しているのです。

そもそも、中国の古典『詩経』にある維新という、そのへんにない厳かな語を引っ張り出して、飾りたてて暴力革命にくっつけたのはいつなるか、誰なるか。世に知恵者はいるものだなあ、と感服する次第です。

というわけで、これから私が延々と皆さんに語ることとなります幕末から明治十一年までの歴史は、「反薩長史観」となることは請合いであります。あらかじめ申し上げておきます。そう、「幕末のぎりぎりの段階で薩長というのはほとんど暴力であった」と司馬遼太郎さんはいいます。私もまったく同感なんです。しかもその暴力が、自分の戦略の都合で、正義と不正義とを区分けした

にすぎません。それにたいして若干の異議を申しあげたいのです。

そもそも歴史というものは、いろいろな見方ができるものなのでありますから、反薩長のものの見方も知っておいて損になることはありません。「西郷隆盛は偉人である」「坂本龍馬は最高の日本人である」といった描かれ方とは逆に、「西郷は毛沢東と同じ」「龍馬には独創的なものはない」という私の見方がいずれ出てきましようが、どうぞびっくりせずに聴いていただけたらと思います